群教セ	G02 － 02
	平22.242集

社会的事象の意味を多角的にとらえる力を高める社会科指導の工夫

── 人々の思いや願いに視点をおいた「ネットワーク図」の段階的な作成と交流を通して ──

長期研修員　　片貝　雅樹

《研究の概要》

本研究は、人々の思いや願いに視点をおいた「ネットワーク図」の段階的な作成と交流を手だてとして取り入れ、社会的事象の意味を多角的にとらえる力を高めることを目指した。具体的には、まず事象と事象、人と人のつながりを表し、次にそのつながりを意識しながらかかわる人々の立場に立って思いや願いを考え、「ネットワーク図」にまとめた。また、図を基にした交流を通して自他の考えを比較したり関連付けたりする活動を行った。

キーワード　【社会―小　多角的　思いや願い　「ネットワーク図」　段階的な作成　交流】

Ⅰ　主題設定の理由

新学習指導要領では、小学校社会科における改善の具体的事項として「（略）作業的、体験的な学習や問題解決学習を一層充実させることにより、学習や生活の基盤となる知識・技能を習得させるとともに、それらを活用して観察・調査したり、各種の資料から必要な情報を集めて読み取ったりしたことを的確に記録し、比較・関連付け・総合しながら再構成する学習や考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習の充実を図る」こととしている。群馬県の学校教育の指針でも「思考力、判断力、表現力の育成」を社会科における重点として位置付け、その手だての一つとして「複数の資料を比較・関連させ、社会的事象の特色や意味を考察させる場の設定」を示している。

自身の協力校での社会科における児童の実態を見ると、資料などを読み取ることは比較的できるが、そこから得た知識を比較したり関連付けたりしながら考えることが不慣れであり、とらえ方が一面的でいろいろな角度から事象を見る力が弱い。また、高学年になるほど社会的事象と自分の生活とのかかわりについて実感をもてない傾向にある。これは、社会的事象の意味を多角的にとらえられず、自分との関連性を考える力が弱いためであると考えられる。

社会科における教科の目標は、よりよい社会の形成に参画しようとする公民的資質の基礎を養うことであり、その出発点となるのは社会的事象と自分の生活とのかかわりを実感することである。それは、社会的事象の意味を多角的にとらえ、様々につながり合う事象同士の中で多くの人々がかかわり合っていることに気付き、その中で自分はどこに位置付くかを考えることで実感できると考える。社会的事象を多角的にとらえるためには、事象にかかわる人々の立場に立って、様々な視点から考える活動が必要である。事象にかかわる人々の思いや願いに視点をおいて様々な立場から事象を考察したり、考察したことを図や文章などで表現したものを基に交流したりすることで、様々な見方や考え方に気付き、社会的事象の意味を多角的にとらえる力を高められると考える。

そこで本研究では、社会的事象の仕組みや働きを図に表し、その図にかかわる人々の思いや願いを考えて表現した「ネットワーク図」を作成したり、それを基に友達と考えを交流したりしながら学習を進めていくことで、社会的事象の意味を多角的にとらえる力を高めたいと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

小学校社会科の学習において、社会的事象にかかわる様々な人々の思いや願いに視点をおいた「ネットワーク図」を段階的に作成して交流をすることにより、社会的事象の意味を多角的にとらえる力が高まることを実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　「つかむ」過程では、学級全体で調べたことを基に社会的事象と他の事象のつながりを「ネットワーク図」に表すことで、社会的事象の仕組みや働きの概要を理解することができるであろう。

2　「追究する」過程では、グループで調べたことを基に社会的事象にかかわる人々の思いや願いに視点をおきながら、事象や人々のつながりを表した「ネットワーク図」を作成したり、それを基に交流したりすることで、社会的事象の意味を多角的にとらえる力を育てることができるであろう。

3　「まとめる」過程では、各自で自分たちの生活をよりよいものにする社会的事象の将来の姿について考えたことを「ネットワーク図」や文章でまとめたり、それを基に交流したりすることで、社会的事象の意味を多角的にとらえる力を高めることができるであろう。

Ⅳ　研究の内容

1　基本的な考え方

(1)　社会的事象の意味を多角的にとらえる力について

社会的事象の意味とは、人々とのかかわりという観点から見たある事象の成り立ちや役割、それが社会に与える影響のことであると考えられる。また、多角的にとらえる力とは、社会的事象にかかわる人々（自分も含む）のつながりを前提とし、それを意識しながら社会的事象について様々な立場から考えたり、異なったとらえ方をしたりすることができる力であると考える。また、交流を通して得た他者の考えを基に、新たな考えをもつことができる力であると考える。このようにして自分で調べたことや考えたことを比較したり関連付けたりしながら社会的事象の意味を考察することで、多角的にとらえる力を高めることができると考える。

(2)　人々の思いや願いに視点をおいた「ネットワーク図」の段階的な作成と交流について

①　人々の思いや願いに視点をおいたとは

社会的事象は、例えば生産者と消費者、情報の送り手や受け手などのように、様々な立場の人々がそれぞれの意図や目的をもってかかわり、その役割を果たしている。そのような社会的事象にかかわる人々の思いや願いに視点をおき、様々な人の立場に立って考察することで、社会的事象の意味について多角的にとらえる力を高めることができると考える。

②　「ネットワーク図」の段階的な作成とは

社会的事象は複数の事象や人々が様々なつながりをもって成り立ち、そのつながりは網目のようになっている。「ネットワーク図」とは、事象と事象、事象と人々とのつながりを矢印で結び、社会的事象の仕組みや働きを図に表したものである。「ネットワーク図」の作成は、以下のような段階を踏んで行う。

まず、社会的事象やかかわる人々を付箋紙に書いて台紙に貼り、それらがどのようにつながっているかを考え、矢印で結ぶ（図１）。

次に、自分を含めた社会的事象にかかわる人々の思いや願いを考え、吹き出し型の付箋紙に書いて図に貼る（図２）。

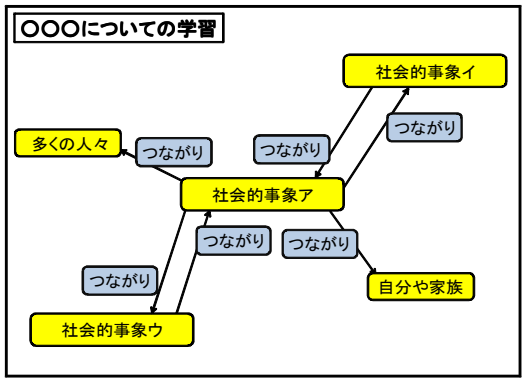


図１　段階を踏んで作成した「ネットワーク図」の例

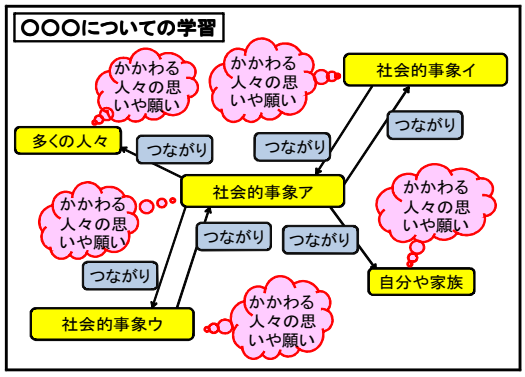


図２　段階を踏んで作成した「ネットワーク図」の例

さらに、単元のまとめの学習では、各自で自分たちの生活をよりよいものにする社会的事象の将来の姿について考えたことを新たな「ネットワーク図」にまとめ、そこに文章による説明を加えたものを作成する。図３は５年生の単元「これからの食料生産」に関する「ネットワーク図」の作成例である。

このように段階的に「ネットワーク図」を作成し、事象と事象、事象と人々のつながりを意識しながら調べたことや考えたことを比較したり関連付けたりすることで、社会的事象の意味を多角的にとらえる力を高めることができると考える。

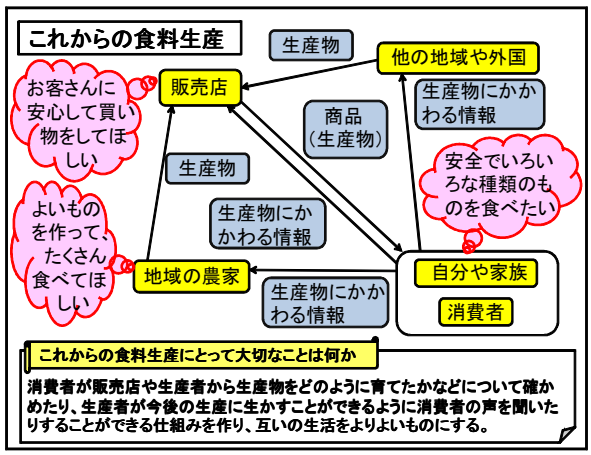


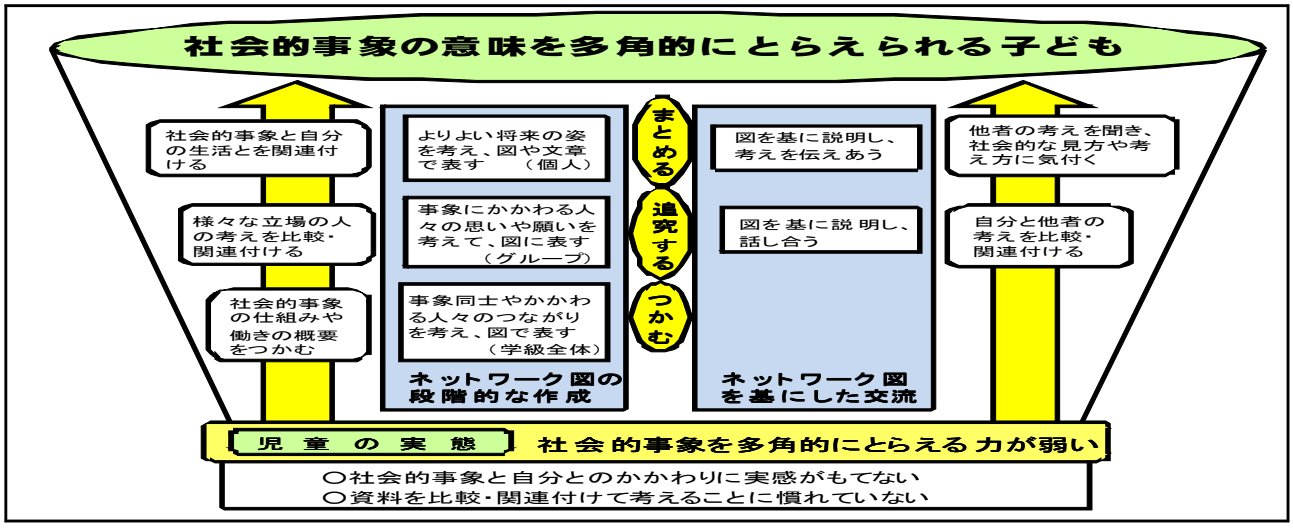
図３　単元「これからの食料生産」のまとめの学習における「ネットワーク図」の作成例

③　「ネットワーク図」を基にした交流とは

「ネットワーク図」を基にした交流とは、「ネットワーク図」を使って互いに発表し合ったり、話し合ったりすることである。作成した「ネットワーク図」についての説明を行い、それに対して意見や質問を述べる。交流の際に「ネットワーク図」を用いることで、視覚的にもとらえやすいというメリットがあり、必要に応じて「ネットワーク図」の修正を行うこともできる。

「追究する」過程では、例えば「それぞれの社会的事象はどのようにつながっているか？」「社会的事象にかかわる人々の思いや願いは？」「社会的事象と自分の生活とのかかわりは？」といった交流の視点を、「まとめる」過程では「友達が考えた『ネットワーク図』のよかったところや疑問に思ったところは何か？」といった交流の視点をそれぞれ提示する。そして、視点に沿って交流を行うことで、自分と友達の考えを比較したり関連付けたりしながら、自分では気付かなかった様々な角度からの見方や考え方に気付き、社会的事象の意味を多角的にとらえる力を高めることができると考える。

２　研究構想図



Ⅴ　研究の計画と方法

１　実施計画

対　　象	小学校第５学年
単　元　名	「情報と社会」
期　　間	10月５日～10月26日
授　業　者	長期研修員　片貝　雅樹

２　抽出児童

A	資料の内容を読み取ることはできるが、複数の資料を比較したり関連付けたりしながら考えをまとめる力がやや不足している。交流を行い、自分と友達の意見を基に考えを整理することで、比較したり関連付けたりすることに慣れ、社会的事象の意味を多角的にとらえる力が高まるであろう。
B	複数の資料を比較したり関連付けたりしながら考えることが比較的できているが、様々な人々のかかわりまでは目が向けられていない。「ネットワーク図」を作成し、社会的事象にかかわる人々の思いや願いを考えることで、社会的事象と自分の生活とのかかわりを実感しながら、社会的事象の意味を多角的にとらえる力が高まるであろう。

３　検証計画

検証項目	検　証　の　視　点	検証の方法
見通し１	つかむ過程で、学級全体で調べたことを基に社会的事象と他の事象のつながりを図に表すことは、社会的事象の仕組みや働きの概要を理解する上で有効であったか。	「ネットワーク図」 ワークシート 活動状況の観察 記録用ビデオ 振り返りカード 事後アンケート
見通し２	追究する過程で、グループで調べたことを基に社会的事象にかかわる人々の思いや願いに視点をおきながら、事象や人々のつながりを表した「ネットワーク図」を作成したり、それを基に交流したりすることは、社会的事象の意味を多角的にとらえる力を育てる上で有効であったか。	
見通し３	まとめる過程で、各自で自分たちの生活をよりよいものにする社会的事象の将来の姿について考えたことを「ネットワーク図」や文章でまとめたり、それを基に交流したりすることは、社会的事象の意味を多角的にとらえる力を高める上で有効であったか。	

４　単元の目標および評価規準

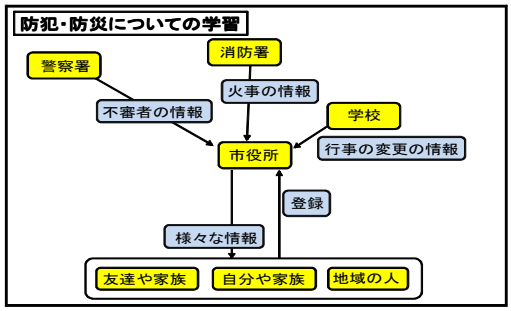
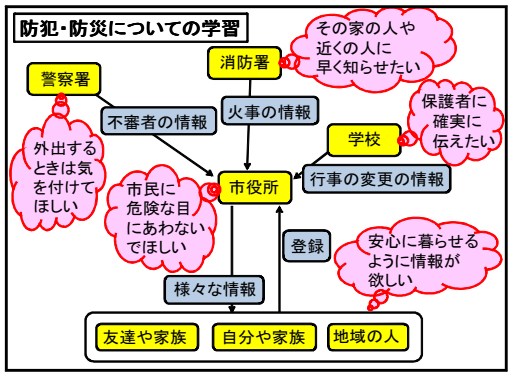
(1)　単元の目標

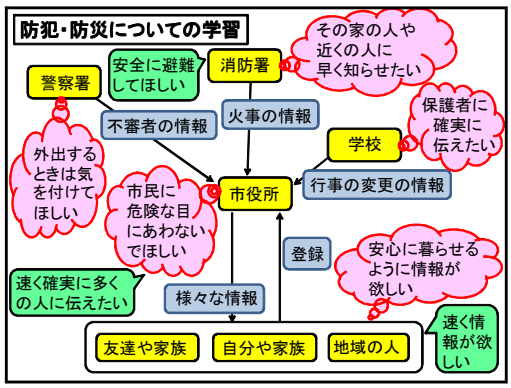
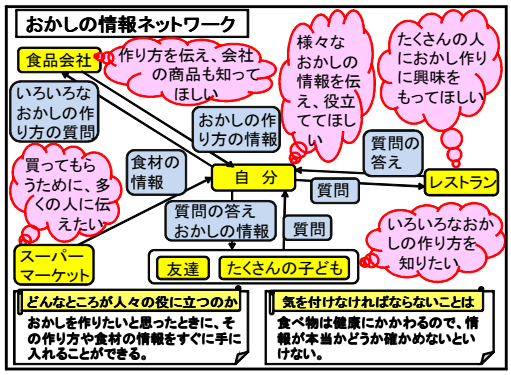
情報ネットワークの働きやそれが国民生活に大きな影響を及ぼしていることを理解すると共に、社会の情報化の進展と情報の有効な活用について関心をもつことができる。

(2)　評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
情報化された社会の様子に関心をもって意欲的に調べ、社会の情報化のよりよい進展について考えようとしている。	情報ネットワークにかかわる人々の思いや願いについて考えたり、友達の意見を基に自分の考えを整理したりしながら、社会的事象の意味について適切に表現している。	様々な方法を用いて、情報化した社会の様子についての必要な情報を集めて読み取ったりまとめたりしている。	情報ネットワークの働きや情報化の進展が国民生活に大きな影響を及ぼしていることを理解している。

５　指導計画（全９時間）

過程	時	学　習　活　動	研　究　上　の　手　だ　て	「ネットワーク図」の作成例
つかむ	1	○学習課題「情報ネットワークについて調べてみよう」をもつ。 ○資料を基にして、防犯・防災にかかわるメール配信システムの「ネットワーク図」を作成する。	○「ネットワーク図」の作成方法を理解できるように、児童は教師と一緒に図を作成する。 ○社会的事象と他の事象とのつながりを「ネットワーク図」に表すことで、その仕組みや働きを視覚的にとらえられるようにする。	
追究する	2・3	○各自で公共サービス（医療、福祉、教育）にかかわる情報ネットワークについて調べ、「ネットワーク図」を作成する。	○前時に作成したものを参考に、調べた内容を整理して見やすく「ネットワーク図」にまとめるように助言する。 ○児童が図の作成を円滑に進めることができるように、必要な資料を用意しておく。	
	4・5	○「ネットワーク図」に、かかわる人々の思いや願いを考えて書	○情報ネットワークにかかわる人々の思いや願いを考え、それらを比較したり関連付けたりすることで、社会的	

		き、それらを基に情報ネットワークの働きについて考える。	事象の意味を多角的にとらえながら考えられるようにする。	 ※子どもたちが各自で作成するのは医療、福祉、教育にかかわる情報ネットワークの図であり、上記のものは防犯・防災の情報ネットワークを例に作成したもの。
	6	○それぞれが調べた情報ネットワークについてまとめた「ネットワーク図」を基に話し合う。	○「ネットワーク図」を基にした交流場面を設け、自分では気付かなかった新たな見方や考え方を知り、多角的にとらえる力を育てることができるようにする。	
	7	○情報を発信するときにはどのようなことに気を付けなければならないかを「ネットワーク図」や資料を基に考え、話し合う。	○情報ネットワークの発信する側に立った場合に間違った情報を流してしまうと受け手が困ったり混乱したりすることを「ネットワーク図」に書いた内容や教師が用意した資料を基に考えられるようにする。	
まとめる	8	○自分たちの役に立つと思う情報ネットワークを考え、「ネットワーク図」に表す。	○人々の役に立つと思う情報ネットワークの図を作成することで、学習で得た知識と自分の生活とを関連付けながら考えを整理し、社会的事象の意味を多角的にとらえる力を高められるようにする。	 ※上記は児童が作成すると思われる図の例。
	9	○考えた情報ネットワークについて、「ネットワーク図」を基に発表し合う。	○新たに作成した「ネットワーク図」について交流する場面を設け、情報ネットワークに対する見方や考え方に気付けるようにする。	

Ⅵ　研究の結果と考察

1　つかむ過程（第１時）における「ネットワーク図」の作成の有効性について

(1)　結果

情報ネットワークの仕組みや働きの概要をつかむため、児童の地域の防犯・防災の情報ネットワークを例として取り上げ、学級全体でＷｅｂページを参考に、火事や不審者などの情報が送られてくることや情報の発信者（市役所、消防署、警察署、学校）や受信者（自分と家族、友達と家族、地域の人）を確かめた。本単元の場合、情報ネットワークにかかわる人や場所は発信者や受信者、そのつながりはやり取りされる情報の内容ということになる。

情報の内容を『青』、発信者や受信者などの情報ネットワークにかかわる人や場所を『黄』の付箋紙に書いた後、児童は教師が例示したものを参考に、運営主体である市役所を図の中心にして他の情報ネットワークにかかわる人や場所の『黄』の付箋紙をその周りに貼った。そして、情報が送られる方向に合わせ、矢印で結んだ。その際に図が見やすくなるように、『黄』の付箋紙の位置は、矢印が交差しないように配慮した。最後に、情報の内容を書いた『青』の付箋紙を貼った。このようにして「ネットワーク図」を完成させた（「つかむ」過程の「ネットワーク図」作成例を参照）。

(2)　考察

振り返りカードを見ると、多くの児童が「ネットワーク図」に表すことで情報ネットワークの仕組みや働きがとても分かりやすくなったと答えた。自由記述欄には「いろいろなところから市役所に情報が来ている」「わたしたちや地域の人に市役所から情報が送られてくる」といった内容のものが多く見られた。このように防犯・防災の情報ネットワークを基に「ネットワーク図」を作成したことで、様々な人々がつながり合い、情報のやり取りを行っていることに気付くことができたと

考える。実際に目には見えない事象同士のつながりを「ネットワーク図」に表し、視覚的にとらえやすくすることは、社会的事象の仕組みや働きの概要を理解するために有効であったと考える。

振り返りカードの記述から、抽出児童Ａは今まで知らなかった防犯・防災の情報ネットワークの仕組みを理解することができたと考える。また、抽出児童Ｂは多くの情報が送られてくる背景には様々な人の存在があることを理解することができたと考える（表１）。

表１　抽出児童ＡとＢの振り返りカードの記述

【抽出児童Ａ】
・いろいろなことを知らずに使っていたのがびっくりしました。市役所が情報を送っていることが分かりました。
【抽出児童Ｂ】
・色々な人から私たちの所までたくさんの情報が来ていることが分かりました。

２　追究する過程（第２～７時）における段階的な「ネットワーク図」の作成と交流の有効性について

(1)　結果

第２～３時は、教育・福祉・医療の情報ネットワークの中から各自が調べたいものを選択し、同じ分野を選択したもの同士でグループを編成した（教育１グループ、福祉１グループは抽出児童Ｂを含む、医療２グループのうち一つは抽出児童Ａを含む）。児童はインターネットから見付けた資料や教師があらかじめ用意した資料を参考にしながら「ネットワーク図」を作成した。

第４時は、第１時に取り上げた防犯・防災の情報ネットワークにかかわる人々の思いや願いについて学級全体で考える活動を行った。抽出児童Ｂは積極的に挙手し、自分の考えを発言することができた。児童から出された意見を基に人々の思いや願いを整理し、吹き出し型の『赤』の付箋紙に記入し、図に貼った。表２は、児童から出された主な考えである。

第５時は、グループで調べた情報ネットワークにかかわる人々の思いや願いについて話し合い、それを吹き出し型の『赤』の付箋紙に書き、図に貼った（図４）。表３は、それぞれのグループから出された主な考えである。次に、作成した「ネットワーク図」に貼られた全ての人々の思いや願いを比較し、気付いたことをグループで話し合った。抽出児童Ａのグループでは、情報ネットワークを利用している複数の病院が「情報を速く正確に送りたいという願いをもっている」、抽出児童Ｂのグループでは、かかわる多くの人々が「健康に生活したい（してほしい）という思いをもっている」、という共通性を見い出すことができた。

第６時はグループ毎に作成した「ネットワーク図」を使って交流を行った。発表者の説明後、聞き手から意見や感想、質問を述べる時間を設定したが、そこでは質問が中心だった。そして、聞き手から出た意見を基に新たに気付いたことを『緑』

表２　学級全体で考えた人々の思いや願い（第４時）

・近づかないようにしたり、近くに行くとあぶないから速く知らせたい＜消防署＞
・地域の人に心配させないように速く伝えたい
＜警察署＞
・生活に役立ててほしい＜市役所＞
・自分の子どもを危ない目に遭わせたくない
＜利用者＞

図４　「ネットワーク図」を基に話し合う児童の様子

表３　グループで考えた人々の思いや願い（第５時）

（教育グループ）
・生活に役立つ情報がほしい＜利用者＞
・子どもたちに分かりやすい学習方法を伝えたい
＜小・中学校＞
（福祉グループ）
・病気にならないように気をつけて生活してほしい
＜保健センター＞
・健康かどうか調べてほしい＜利用者＞
（医療グループＡ）
・自分が病気になっても登録してあれば安心
＜利用者＞
・患者さんが元気になってほしい＜病院＞
（医療グループＢ）
・情報を正確に集めたり、送ったりしたい
＜データセンター＞
・速く画像の結果を知らせたい
＜画像読影の支援施設＞

の付箋紙に書き、「ネットワーク図」に貼った。抽出児童Ａは話合いでの発言は少なかったが、友達の意見をよく聞き、その内容を基に「ネットワーク図」を補充していた。抽出児童Ｂのグループでは、交流後に新たに人々の思いや願いを三カ所付け足し、「ネットワーク図」を補充できた。

(2)　考察

学習指導要領の「多種多様な情報を必要に応じて瞬時に受信したり発信したりすることができる情報ネットワークの働き」という記述から、情報ネットワークのもつ働きには三つの観点「①多種多様な情報（を扱える）」、「②必要に応じて（受信、発信できる）」、「③瞬時に（受信、発信できる）」があると考えた。それを基に、第４時と第５時に児童が考えた情報ネットワークにかかわる人々の思いや願い（『赤』の付箋紙）を分類したものが図５である。観点①～③に当てはまらないものは「④その他」とした。

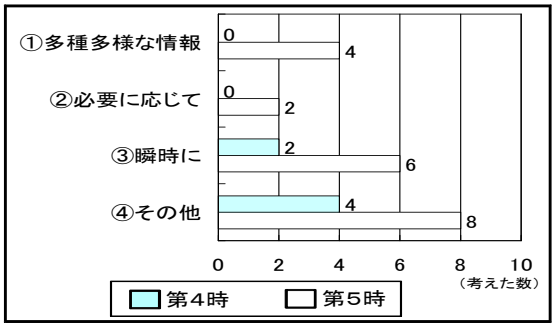


図５　第４時と第５時に児童が考えた思いや願いの分類

第４時では、情報ネットワークの働きにかかわる観点は観点③の一つしか挙がらず、情報ネットワークの働きにかかわる人々の思いや願いというより、「④その他」の人々の業務や生活に直接かかわる思いや願いと考えられるものが多かった。第５時では、観点①、②、③の全てが挙がった。

これは、第４時に扱った防犯・防災の情報ネットワークは緊急時の情報であり、速く情報を伝えるという、観点③の気付きが中心であったためであると考える。また、それぞれの業務にかかわる人々の思いや願いをとらえてしまい、情報ネットワークを通した事象と事象のつながりから人々の思いや願いを考察できなかったためであると考える。

第５時は第４時とは別の情報ネットワークについて追究したことで、多くの種類や量の情報をいつでもやり取りすることができるという①、②の新たな観点が加わったのではないかと考える。また、自分たちが作成した「ネットワーク図」を利用したことで、かかわる人や場所のつながりをより意識しながら人々の思いや願いを考えられたことも新たな観点が加わった要因であると考える。

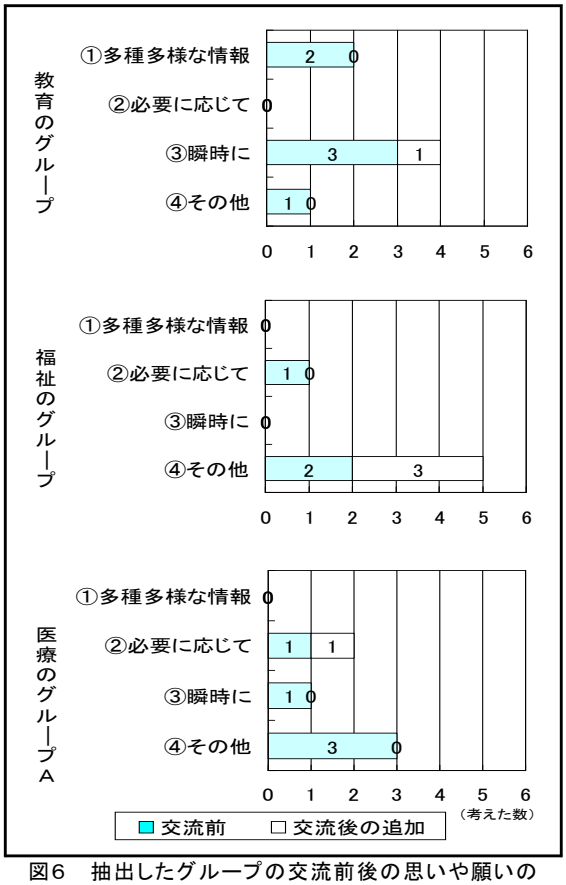


図６　抽出したグループの交流前後の思いや願いの数と観点の変化

図６は三つのグループを抽出し、それぞれのグループが考えた人々の思いや願いの記述内容（『赤』と『緑』の付箋紙）の交流前後の変化をまとめたものある。交流後の追加が見られることから、第６時の交流を通して新たな気付きがあったことが分かる。しかし、どのグループも交流前と同じ観点の記述が増えただけで、情報ネットワークの働きの別の観点への気付きは見られなかった。

これは、交流時の質問内容から児童が交流を通して比較したり関連付けたりしたのは、主にかかわる人々や場所と情報の内容の二つであり、自他の考えた人々の思いや願いを比較したり関連付けたりすることは十分にできなかったためであると考える。その原因は、全てのグループが異なる分野の情報ネットワークの「ネットワーク図」を作成し、交流を行ったため、児童が人々の思いや

願いよりもかかわる人々や場所と情報の内容といった、情報ネットワークの個々の事象に関心を示したからであると考える。

抽出児童Ａは交流後に情報ネットワークの働きの観点①にかかわる新たな記述が見られた（表４）。他のグループが考えた人々の思いや願いの内容を参考に新たな考えをもったものと考えられる。このように、抽出児童Ａは交流を通して多角的にとらえる力が育ってきたと考える。

表4　抽出児童Aの交流前後のワークシートの記述

＜交流前（第５時）＞
・情報を速く正確に送るため。（観点③）
・情報を分かりやすく伝えるため。
＜交流後（第６時）＞
・たくさんの情報が安全にとどくように。（観点①）
・みんなが役立つ情報を速くとどけるため。

抽出児童Ｂは、グループで考えた際の人々の思いや願いは主に観点④にかかわるものだったが、個人のワークシートの記述では①と③の観点への気付きが見られた（表５）。これは、作成した複数の「ネットワーク図」（学級全体とグループで作成したもの）を比較したり関連付けたりしながら、情報ネットワークの働きについて考えることができたためであると考える。

表5　抽出児童Bの「ネットワーク図」作成時（第5時）のワークシートの記述

・ネットワークは速くかんたんに送れる（観点③）から使われるようになってきたのではないかと思います。色々な機械で色々なものが（観点①）手間がかからないで利用できるので生活に役立っていると思いました。

段階的に「ネットワーク図」を作成したり交流を行ったりしながら情報ネットワークについて考察する活動を取り入れた結果、情報ネットワークのもつ働きについてまとめたワークシートの記述を見ると、多くの児童が複数の観点に気付くことができていることから、社会的事象の意味を多角的にとらえる力が育ってきたと考える。

３　まとめる過程（第８～９時）における段階的な「ネットワーク図」の作成と交流の有効性について

(1)　結果

第８時は、各自で人々の役に立つ情報ネットワークを考え、「ネットワーク図」に表していった。図の作成方法はこれまでと同じだが、今回は情報ネットワークと生活とのかかわりを意識させるために自分が発信者の立場となり、さらに最後に情報ネットワークの働きと注意点について文章でまとめた。児童は自分が興味をもっている「映画」「本」「動物」などや、家族の職業や生活にかかわる「乳酸菌飲料」や「ダイエット」などの「ネットワーク図」を作成した。「ネットワーク図」には、児童の考えた人々の思いや願いに「情報」「～を伝えたい（教えたい）」「～について知りたい」といった、情報ネットワークに関する言葉が多く見られるようになった。

第９時は、各自で作成した「ネットワーク図」を基に交流を行った。その際に、教師が事前に児童の作成した「ネットワーク図」の人々の思いや願いをチェックし、児童が新たな見方や考え方を広げることができるよう、意図的なグループ編成を行った。交流では、発表後に児童が互いの「ネットワーク図」を見比べる様子も見られ、聞き手の児童から意見や感想も出された。交流を行いながら、多くの児童は作成した「ネットワーク図」に補充や修正を加えることができた。そして、本時の最後に単元の学習内容を振り返って整理し、文章でまとめた。

抽出児童Ａは友達の「ネットワーク図」をよく見て考え、意見を友達に伝えることができた。抽出児童Ｂは交流で積極的に意見を述べ、話し合ったことを基に「ネットワーク図」に情報ネットワークに「かかわる人々や場所」「情報の内容」「人々の思いや願い」を一つずつ書き加えることができた（図７）。

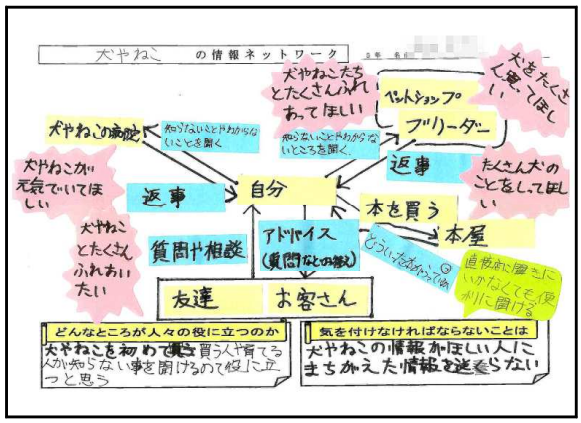


図7　抽出児童Bの作成した「ネットワーク図」

(2) 考察

児童が「ネットワーク図」に表した、かかわる人々の思いや願いについて「追究する」過程のときと同様に『赤』と『緑』の付箋紙を分類した結果、図８のようになった。「追究する」過程に比べ、観点①、②、③の割合が増えている。さらに人々の思いや願いについての記述内容を見てみると、「利用者の役に立ちたい」といったものが多く見られた（表６）。

これは、「追究する」過程では既存の情報ネットワークについての学習であったため、児童は「受信者」の立場で考察していたが、今回は「発信者」という異なった立場から新たな情報ネットワークについて考察したことで、情報を役立てることに対する意識が高まり、その働き（観点①～③）により着目できたためであると考える。

また、「追究する」過程での修正は人々の思いや願いについてだけだったが、「まとめる」過程では交流の結果、「かかわる人々や場所」「情報の内容」「働きや注意点」などの多岐にわたる補充や修正が見られた（表７）。これは、交流を通して自分の考えた情報ネットワークをよりよいものにするための多角的な見方や考え方があることに気付いたり、情報ネットワークには複数の働きや利用の際の注意点があることを想起したりしたことを基に、児童が「ネットワーク図」をよりよいものにしようとした結果であると考える。

さらに、社会的事象と自分の生活とのかかわりに対する意識にも変化が見られた。図９は、授業実践の前後に社会的事象と自分の生活とのかかわりの意識を調べるために児童に実施したアンケートの結果である。

実践前のアンケートでは「社会科で学習したことが自分の生活に役立っているか」という設問に対して「はい」と答えた児童の理由の記述内容を見ると、具体的に自分の生活の場面を挙げて説明できている児童はとても少なかった。

実践後のアンケートでは同様の設問に対して、「はい」の児童が増え、「いいえ」か「わからない」と答えた児童はいなくなり、その理由についても具体的な生活の場面を挙げて記述している児童が増えた。

これは、「ネットワーク図」の段階的な作成を通して、自分を含めた事象同士のつながりを意識しながら、様々な人々の立場に立って考えたことで、社会的事象と自分の生活とのかかわりに実感

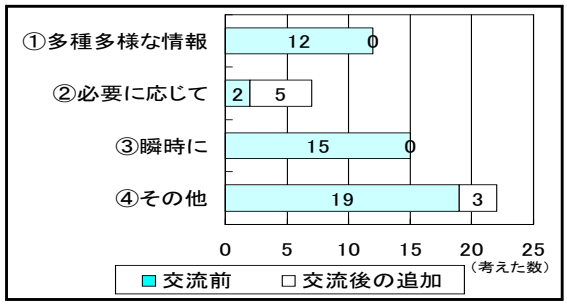


図8 「まとめる」過程での人々の思いや願いの分類

表6 「ネットワーク図」作成時の人々の思いや願い（『赤』の付箋紙）

①多種多様な情報
- たくさん犬のことを知ってほしい＜本屋＞
- この情報ネットワークを使っていろんな本のことを知りたい＜友達、家族、周りの人＞

②必要に応じて
- 新しい商品の情報を速く聞きたい ＜お客さん、知り合い、お年寄り＞

③瞬時に
- 映画の情報を伝えて、役に立ってほしい＜自分＞
- 新しい情報を知って、楽しんでほしい ＜ＣＤの宣伝者＞

④その他
- みんなにたくさんの本を買ってほしい＜本屋＞

表7 交流後に書き加えられた内容（『緑』の付箋紙）

○映画を作る人に直接行かないでネットでやり取りできれば便利＜自分＞
○お客さんに安全な商品を売り出したい ＜スーパーマーケット＞
○直接行かなくても情報ネットワークを使えば便利になる＜友達、周りの人＞
○直接聞きに行かなくても便利に聞ける ＜友達、お客さん＞
○特に一番人気の本を買ってもらいたい＜本屋＞
●ペットショップ
◇どういった本が売っているか＜本屋→自分＞
◆会いにいかなくても聞けるのが便利
◆（ＣＤを）出すのがいつなのか分かって便利
◆教えるときにまちがえないように気を付ける

○･･･人々の思いや願い　●･･･かかわる人や場所
◇･･･情報の内容　◆･･･働きや注意点

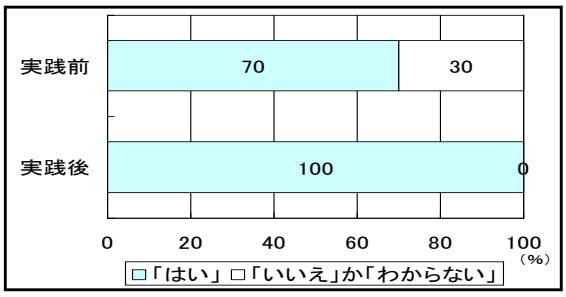


図9 社会的事象と自分とのかかわりの意識についてのアンケート結果

がもてたためであると考える。

抽出児童Ａは「追究する」過程では情報ネットワークの働きの①と③の観点に気付いたが、ここでは「必要に応じて」という、観点②にかかわる人々の思いや願いの記述が「ネットワーク図」や学習のまとめの記述（表８）に見られた。このように新たな観点への気付きがあったことから、「ネットワーク図」の作成や交流を通して、社会的事象を多角的にとらえることができたと考える。

表８　抽出児童Ａの学習のまとめの記述

・情報ネットワークのいいところは、発信者はいっせいに情報を送れる（観点①、③）。受信者はケータイやパソコンなどでかんたんに情報をもらえる（観点②）。情報ネットワークで気をつけないといけないところは、発信者はまちがった情報を送らない。受信者は情報が本当かどうか確かめる。

表９　抽出児童Ｂの学習のまとめの記述

・情報ネットワークは様々な人が利用して、たくさんの情報をやり取りすることが分かりました。自分で作ったネットワーク図も役に立つといいです。ネットワーク図を作りながらたくさんのことを知ったので生活に役立てたいです。自分もたくさんの情報をやり取りしたいです。

抽出児童Ｂも抽出児童Ａと同様に、「追究する」過程では情報ネットワークの働きの①と③の観点への気付きが見られたが、新たに作成した「ネットワーク図」の記述から観点②への気付きがあったことが分かった。また、学習のまとめの記述から、自ら進んで社会的事象にかかわっていこうとする気持ちをもてたことが分かる（表９）。これは、「発信者」という新たな立場に立って事象同士のつながりを考えたことで、自分の生活と情報ネットワークとのかかわりに対する意識を高めることができたためであると考える。

以上のことから、段階的な「ネットワーク図」の作成と交流を通して、社会的事象の意味を多角的にとらえる力が高まってきたと考える。

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

○　「つかむ」過程では、「ネットワーク図」を作成することで社会的事象の仕組みや働きが視覚的にとらえやすくなり、その概要を理解することができた。

○　「追究する」過程では、社会的事象にかかわる人々の思いや願いを「ネットワーク図」に表すことでそれぞれの立場に立って考えたり、交流を通して自他の考えを比較したり関連付けたりしたことで様々な角度からの見方や考え方があることに気付き、社会的事象の意味を多角的にとらえる力を育てることができた。

○　「まとめる」過程では、自分たちの生活をよりよいものにする社会的事象の将来の姿について考えたことを「ネットワーク図」や文章でまとめ、交流を行ったことで、様々な角度からの考えをもつことができるようになり、社会的事象の意味を多角的にとらえる力を高めることができた。

２　課題

○　社会的事象にかかわる人々の思いや願いについての自他の考え方の違いを明確にするために、「ネットワーク図」に表した人々の思いや願いを分類したり整理したりする活動を取り入れることが必要である。

○　「追究する」過程では、異なる分野について調べたグループで交流を行ったが、自他の考えた人々の思いや願いをうまく比較したり関連付けたりできなかった。児童が比較したり関連付けたりしやすいよう、同じものについて調べたグループ同士で交流を行うなどの工夫が必要である。

＜参考文献＞

・片上　宗二、柳下　則久　編著　『小学校学習指導要領の解説と展開　社会編』　教育出版（2008）
・廣嶋　憲一郎　編著　『小学校新学習指導要領の授業　社会科実践事例集５年』　小学館（2009）
・森分　孝治、片上　宗二　編著　『社会科重要用語 300の基礎知識』　明治図書（2000）